

平成 27 年産春野菜の需給・価格の見通しについて

1 春キャベツ（4～6月）

生産地の動向等

(主な産地：千葉、神奈川、愛知)

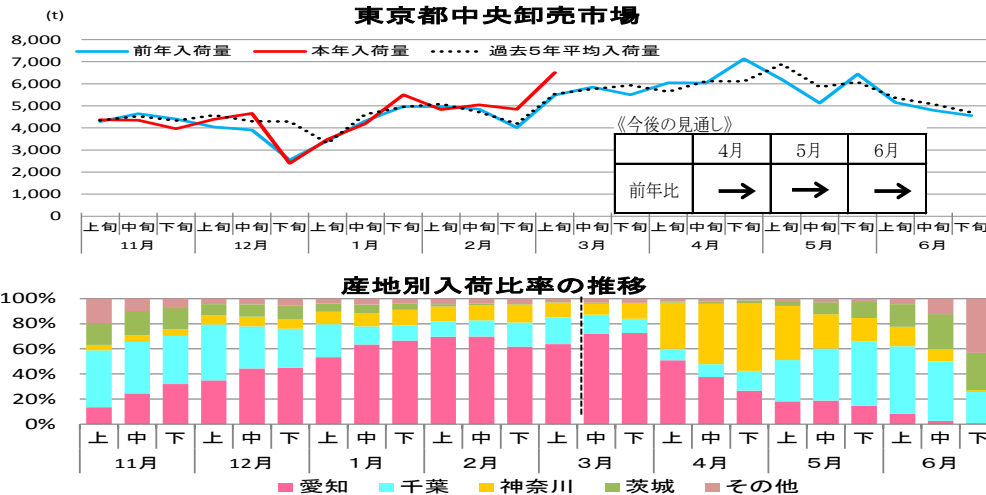
1 作付面積は、千葉は前年比100%、神奈川及び愛知は同101%。

生育状況は、千葉は、「春系」概ね順調であるが、2月下旬の降雨、気温の変動幅が大きく、ほ場によってバラツキがある。「初夏どり」も概ね順調であるが、2月下旬の降雨の影響で遅れている。神奈川は、適度な降雨があり、生育は順調で病害の発生もない。愛知は、2月上旬は気温が低く、生育が停滞していた。その後、天気が回復して生育は順調である。

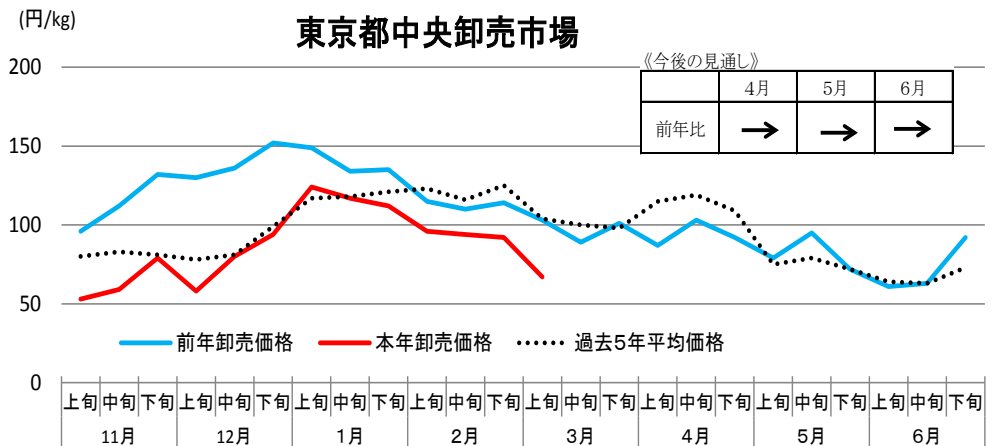
出荷開始は、千葉は、「春系」3月下旬・「初夏取り」5月下旬、神奈川は「春系」3月下旬、愛知は、「冬系」3月上旬・「春系」3月下旬・「初夏取り」5月上旬。

2 この先1ヶ月の気象予報は、平均気温、降水量及び日照時間ともにほぼ前年並みとなる見込み。

入荷量の推移等



価格の推移等



野菜需給・価格情報委員会での需給・価格の見通し

1 供給見通し

出荷量は、現在雨も多く気温が高いことから、4月に入り病害の発生の懸念はあるものの、全体的には概ね生育は順調なことから、期間を通じて前年並みの見込み。

2 需要・価格見通し

価格は、主産地の愛知県産や千葉県産において順調に生育することが見込まれることから、期間を通じて前年並みの見込み。

加工・業務用は、現在、中国産の使用は例年の半分程度であり、今後も国内産の順調な出荷が見込まれることから、本年は国内産へのシフトが見込まれる。

2 春だいこん（4～6月）

生産地の動向等

（主な産地：千葉、長崎）

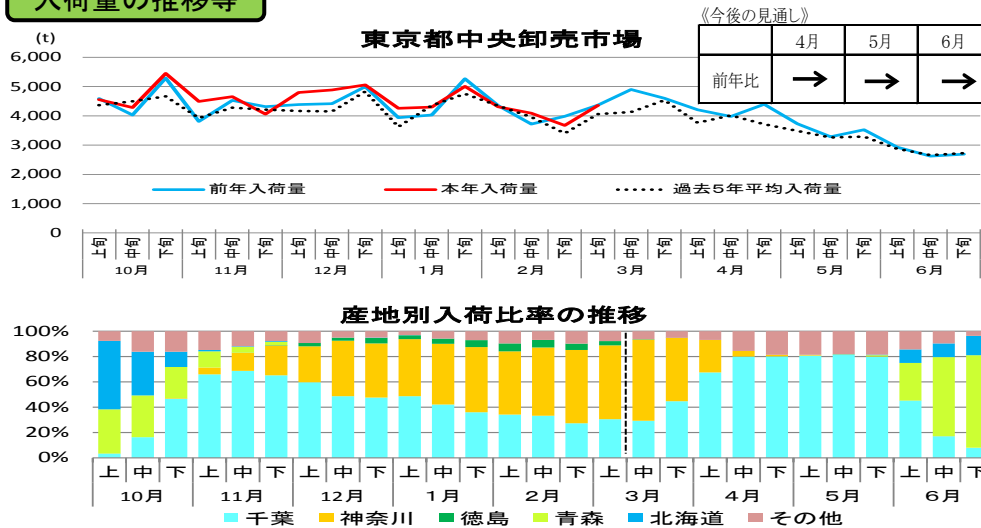
1 作付面積は、千葉は前年比100%、長崎は同99%。

生育状況は、千葉は、年内の降雨により、播種時期にバラツキがみられたものの、生育は順調に推移している。長崎は、降雨の影響が懸念されたが、生育は順調で病害虫の発生もない。

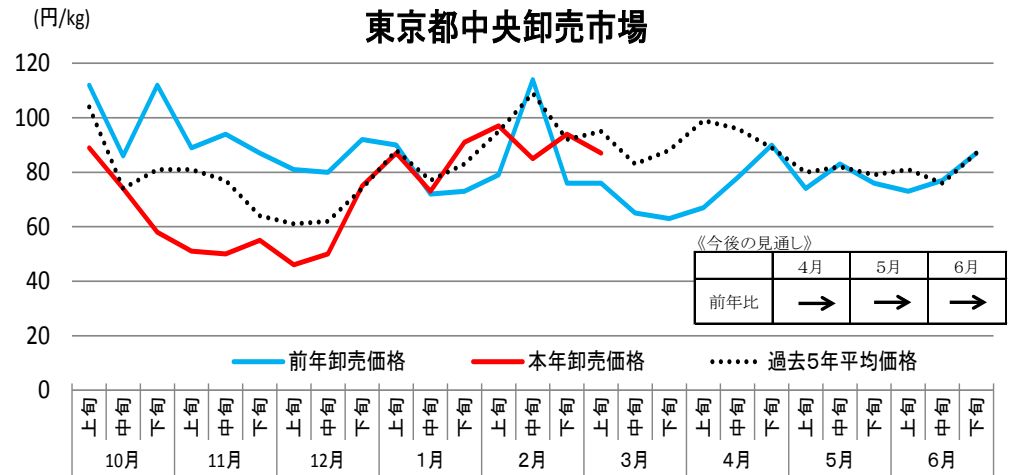
出荷開始は、千葉は3月上旬、長崎は、平年より若干早めの2月下旬。

2 この先1ヶ月の気象予報は、平均気温、降水量及び日照時間ともにほぼ平年並みとなる見込み。

入荷量の推移等



価格の推移等



野菜需給・価格情報委員会での需給・価格の見通し

1 供給見通し

出荷量は、主産地である千葉県産を中心に生育が順調であることから、期間を通じてほぼ前年並みの見込み。現在の多雨等の影響もあり、4月下旬から5月上旬に一時、出荷の谷間ができる可能性がある。

2 需要・価格見通し

価格は、主産地において順調な生育が見込まれることから、期間を通じて前年並みの見込み。

加工・業務用は、これまでの神奈川県三浦産から茨城県産や千葉県産にシフトしていく時期であり、生育が遅れているとの情報があるものの、業界に与える影響は小さいと考えられる。また、例年4月の相場が上向き加工メーカーにとって入手しにくい時期ではあるが、今年の手入は順調と見込まれる。

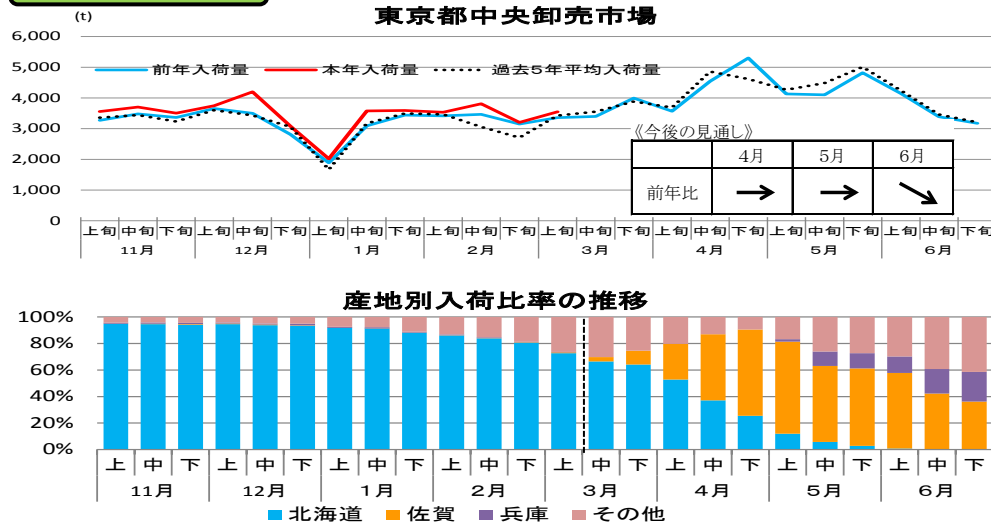
3 たまねぎ（4～6月）

生産地の動向等

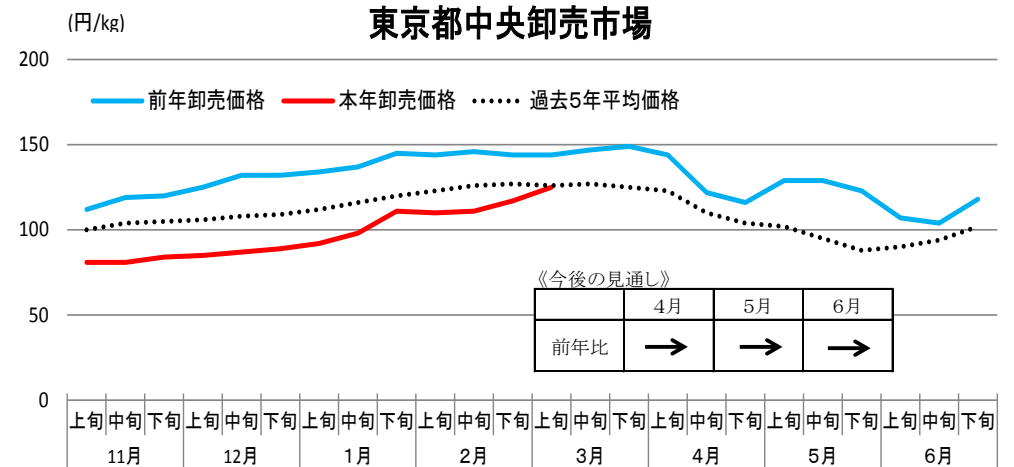
（主な産地：北海道、佐賀、兵庫）

- 1 作付面積は、北海道は前年比103%、佐賀は同102%、兵庫は同100%。
生育状況は、佐賀は、定植時期の降雨により生産者によりバラツキがあるものの、生育は順調に推移している。兵庫は、極早生、早生は1月の降雨の影響が心配されたが、生育は順調で、主力の中晩生は定植遅れにより、生育もやや遅くなっている。
出荷開始は、北海道は貯蔵ものを出荷、佐賀は3月中旬、兵庫は4月下旬。
- 2 この先1ヶ月の気象予報は、平均気温、降水量及び日照時間ともにほぼ前年並みとなる見込み。

入荷量の推移等



価格の推移等



野菜需給・価格情報委員会での需給・価格の見通し

- 1 供給見通し
出荷量は、4月と5月はほぼ前年並みと見込まれるが、6月は佐賀県産がこの時期に出荷される面積が減少していること等から前年を下回る見込み。
- 2 需要・価格見通し
価格は、佐賀県産などで病害の影響も懸念されるものの、概ね順調な出荷が見込まれることから前年並みの見込み。
加工・業務用では、中国産は、昨年の残留農薬問題や国内価格が安かったことから、27年産の作付面積は減少するという情報がある。ただし、国内産が順調に生育すれば影響は小さいと考えられる。また、円安により中国産との価格差が小さくなったこともあり、国内産へシフトする業者も増えている。

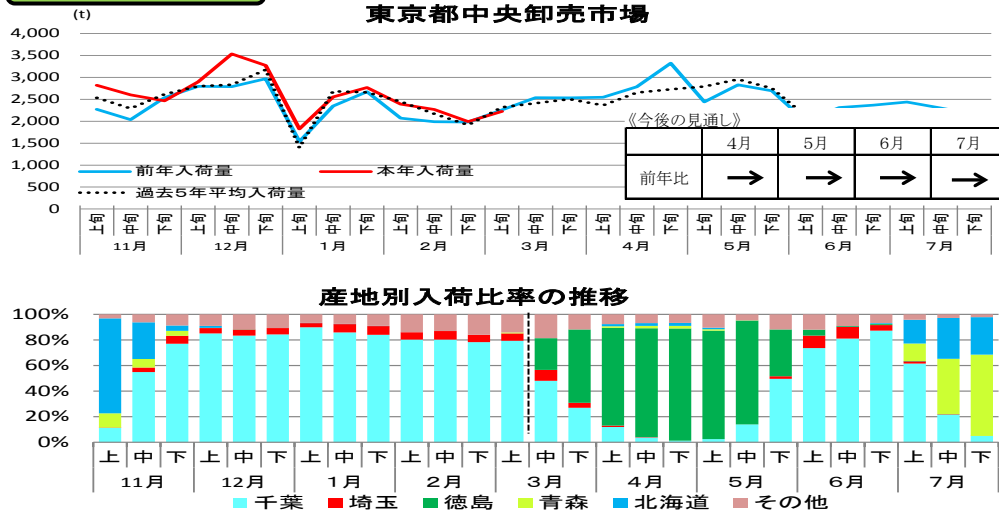
4 春夏にんじん（4～7月）

生産地の動向等

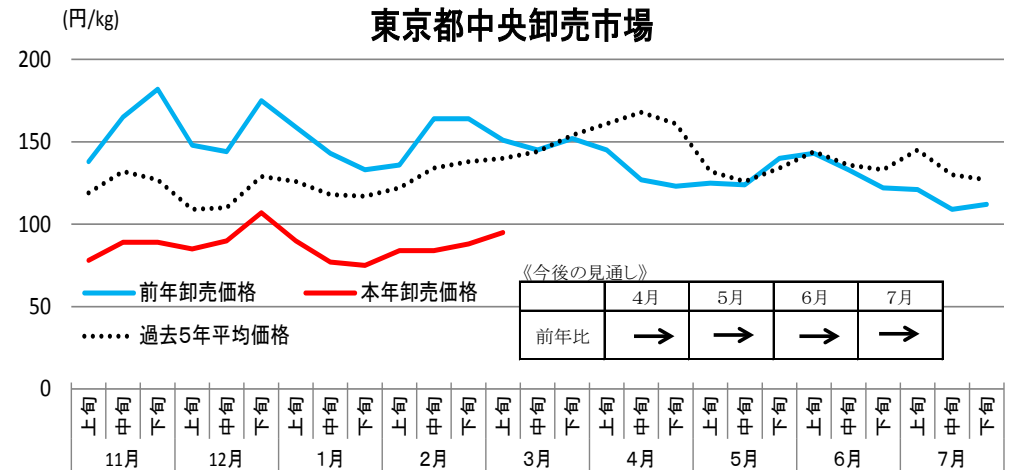
（主な産地：徳島、千葉）

- 作付面積は、徳島は前年比99%、千葉は同103%
生育状況は、徳島は、年末寒波の影響で3～4日程遅れている。千葉は、1月下旬以降の降雨の影響で播種作業が10日ほど遅れているものの、生育は順調に推移している。
出荷開始は、徳島は3月上旬、千葉は4月下旬。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温、降水量及び日照時間ともにほぼ前年並みとなる見込み。

入荷量の推移等



価格の推移等



野菜需給・価格情報委員会での需給・価格の見通し

- 供給見通し
出荷量は、主産地の生育も順調なことからも、期間を通じてほぼ前年並みの見込み。
- 需要・価格見通し
価格は、順調な出荷が見込まれることから、期間を通じて前年並みの見込み。
加工・業務用では、この時期の中国産の品質は良いものの、円安により価格差が小さくなったことから国内産にシフトする動きが強まっている。また、加工用の産地の開拓も進んでいる。

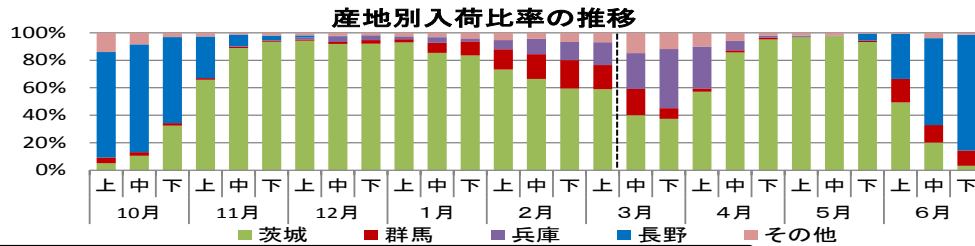
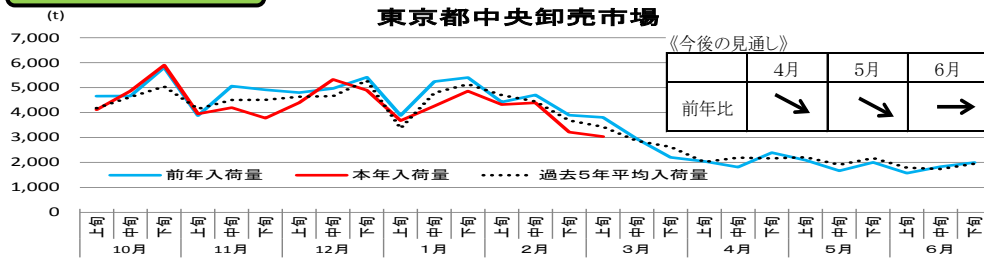
5 春はくさい（4～6月）

生産地の動向等

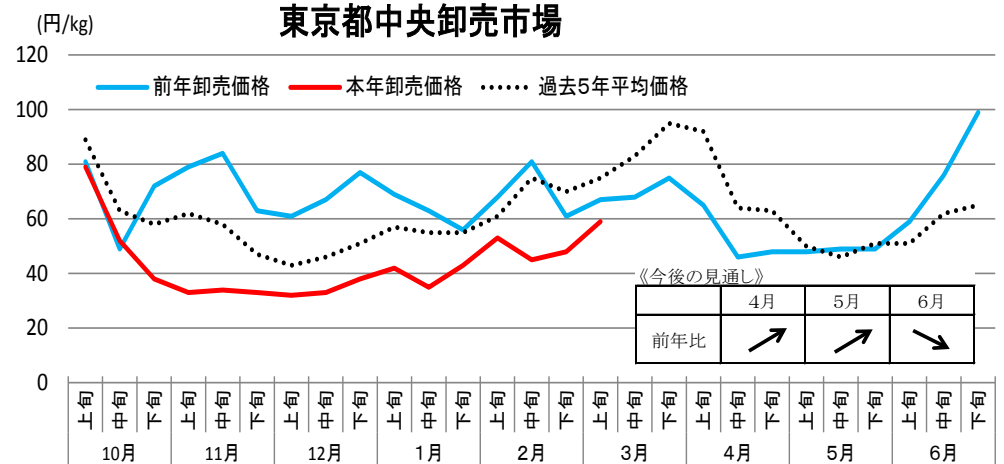
（主な産地：茨城、長野）

- 1 作付面積は、茨城は前年比91%、長野は同100%。
生育状況は、茨城は、早生種は低温の影響から生育に遅れがでている。中生種の生育は順調に推移している。長野は、生育は順調に推移している。
出荷開始は、茨城は3月中旬、長野は5月下旬。
- 2 この先1ヶ月の気象予報は、平均気温、降水量及び日照時間ともにほぼ平年並みとなる見込み。

入荷量の推移等



価格の推移等



野菜需給・価格情報委員会での需給・価格の見通し

- 1 供給見通し
出荷量は、近年のこの時期の価格が安かった影響で作付面積が減少していること等から、4月から5月は前年を下回る見込み。6月は、長野県産の生育も順調であることから前年並みの見込み。
- 2 需要・価格見通し
価格は、4月及び5月は、入荷量が減少すると見込まれることから、前年を上回る見込み。6月は順調な出荷が見込まれることから、高かった前年を下回る見込み。
加工・業務用は、現在、在庫が多めの業者もいるが、それ以外の業者が市場から購入する場合には、価格変動要因となる可能性がある。

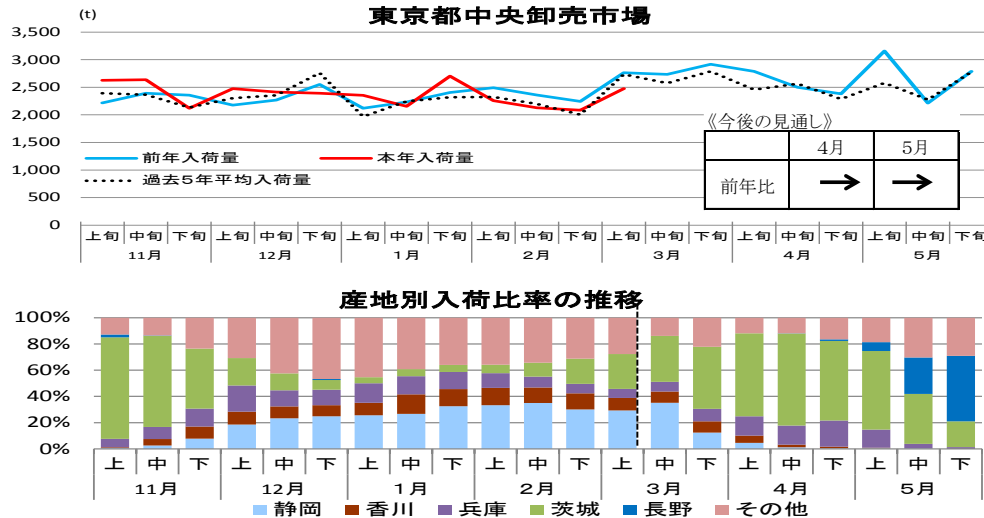
6 春レタス（4～5月）

生産地の動向等

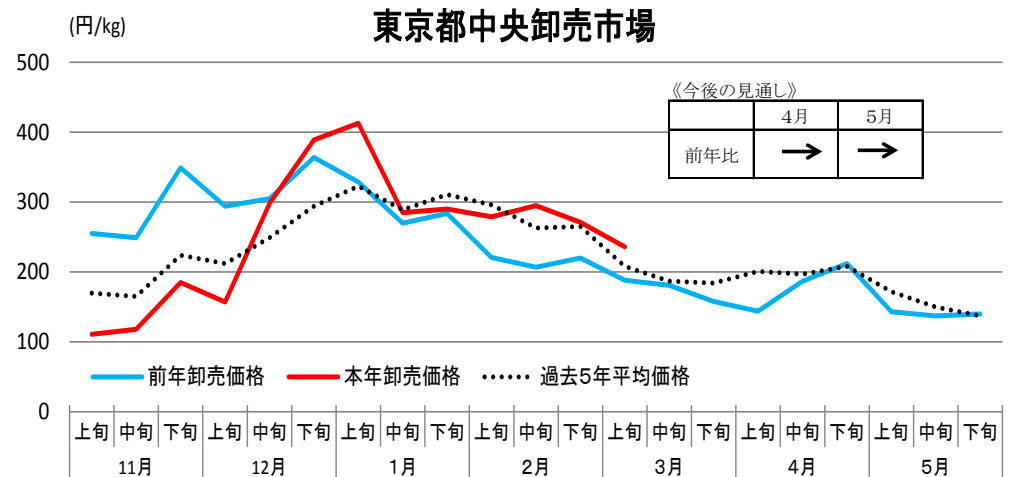
（主な産地：茨城、長野、兵庫）

- 1 作付面積は、茨城は前年比95%、長野は同104%（ただし、26年産は降雪の影響で定植できなかったほ場があり、作付面積として平年並み。）、兵庫は同99%。
生育状況は、茨城は低温の影響で生育が遅れていたが、現在は回復して順調に推移している。長野は、若干遅れ気味であるが、生育は順調に推移している。兵庫は、1～2月の多雨で、灰色カビ病の発生が前年より多かったが、その後、回復して生育は順調に推移している。
出荷開始は、茨城は3月上旬、長野は4月中旬、兵庫は3月中旬。
- 2 この先1ヶ月の気象予報は、平均気温、降水量及び日照時間ともにほぼ平年並みとなる見込み。

入荷量の推移等



価格の推移等



野菜需給・価格情報委員会での需給・価格の見通し

- 1 供給見通し
出荷量は、主産地の生育が順調であることから、期間を通じて前年並みの見込み。
- 2 需要・価格見通し
価格は、各主産地とも順調な出荷が見込まれることから、前年並みの見込み。

その他、春野菜全体の消費の動向等

① 春先以降の消費を左右する要因、注目している要因

- ・ 機能性野菜の動向に注目しているが、販売する際に野菜ごとの機能性成分などを、どのように正確に消費者に伝えられるかが課題である。現在、アピール方法を検討している。
- ・ 高リコピンのトマトやカロテン含有量の多いにんじんなど、高機能性野菜の販売を強化していく。
- ・ 加工食品が値上げ傾向となっていることから、生鮮野菜等生鮮品の販売を強化していく。

② 主要6品目以外の野菜で、販売戦略として特に注目している品目の動向

- ・ ミニトマト、スナップえんどう、ズッキーニなどの販売が伸びており、今後も食べ方の提案をしながら販売していきたい。ズッキーニは30~40歳代の方が好んで購入されており、現在は輸入物が中心であるが、国内産地に生産拡大を要望している。
- ・ 春に向けて、芽もの野菜など食べ方を提案しながら販売を強化していきたい。
- ・ 一部の外食チェーンでは、単価が高くとも美味しいものを提供すれば顧客も確保できるとの認識により、食材を外国産から国産にシフトする動きがある。

③ 震災や原発事故の影響による消費動向

- ・ 関心が薄れており問い合わせ件数は減っているものの、小さい子供のいる親や学校などから懸念する声も聞こえる。
- ・ 今後、夏場に向け東北産が出回ってくるので問い合わせがある可能性がある。

④ 野菜の物流を巡る情勢変化の影響とその対応

- ・ ドライバー不足は深刻な状況にある。この状況を解消するには、流通関係業者と連携していかなければならないと考えている。
- ・ モーダルシフトでは、列車を念頭に検討していることが多いが船舶による方法も考えないといけない。また、コンテナも現在は5トンコンテナが主流であるが、もっと大型のコンテナの活用も考えていく必要がある。さらに、他業種が使用したコンテナを折り返して使うなども検討していく必要がある。
- ・ 遠隔地の生産サイドでも、モーダルシフトへの対応がみられ始めたことから、今後とも生産者サイドへの情報提供を続けていきたい。
- ・ 今後は、物流拠点を消費地に近いところに整備する必要がある。